

# 信濃教育

## 「賓主互換」

茶道の世界に「賓主互換（ひんしゅごかん）」という言葉があるようだ。亭主がお茶を点てるということは、単にお茶を出すだけでなく、自分の大切な器を預けるに値する相手だと認めることで客をもてなす。逆に、客の側は、その信頼に精一杯応えることで、亭主をもてなす。亭主と客というのは厳然として分かれているけれど、時に互いの立場が入れ替わる瞬間があるという意味のようである。

校内合唱コンクールが終わり、担任の先生は学級通信に次のような言葉を載せた。

「そして何より、あんなにもすばらしい合唱を聴かせてくれて、ありがとう。家に帰ってから、ビデオでもう一度聞いてみたのだけれど、思わず『うお〜』とうなってしまいました。愛と魂のこもったソウルフルな合唱でした。間違いなく『人の心に届く』合唱であったと思います。改めて『すごい人たちだなあ』と思わされました。」

先生と子どもは、教える側と教えてもらう側。教師は一段上から子どもたちを導く立場。そういうことを全く感じさせない担任のメッセージ。ただただ、子どもたちの成し遂げたことに感動し、感謝している。どちらが先生でも、どちらが教え子でもないような世界。まさに「賓主互換」である。ここに至るまでには、先生と子どもたちにはわからないストーリーがあるのだろう。

新年度が始まった。数多くの出会いの中でのスタートである。子どもたちとの生活は、数々の思いもよらぬ出来事の連続である。思い通りに行かず悲嘆に暮れたり、気持ち伝わらず落胆することもある。しかし、子どもを「自分の大切な器を預けるに値する相手」と信頼する気持ちがあれば、子どもたちはその信頼にきつと応えようとしてくれる。そして「互いの立場が入れ替わる瞬間」を味わうことができる。

その時が「教師冥利に尽きる」と感じる時なのだろう。